

## 新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 小川 洋

平成三十一年を迎え、謹んでご祝詞申し上げます。

旧年中は、当協会が主催いたしました講演会・学習会をはじめ研修などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も三十七年目を迎え、この『ながさきの空』も四三八号を刻むこととなりました。

さて、皆様ご承知の通り昨年六月の役員会におきまして、越中哲也理事長が「高齢のため今年度末をもって理事長を退任し、当協会を閉じた」と表明されました。理事長には、昭和五十七年の当協会設立以来、長崎学の研究にご貢献頂くとともに、私も会員の指導に大変ご尽力頂きました。当協会と致しましては、理事長のご意向を尊重し二〇一九年三月三十一日をもって活動を終了することに致しました。

協会としては残りわずかとなりましたが、引き続き皆様方のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成三十一年正月

## 新年にあたって

越中 哲也

先ずは新年の御祝詞を申し上げます。

お目出とう御座います。本年も良呂敷くお願い申し上げます。

本会も十八銀行の御支援により創立させて戴いてから三十七年となり、毎週開催して参りました各種講座も盛会裡に運営できました事、一重に皆様方の御支援の御蔭と厚く感謝申し上げます。

今回の「ながさきの空 四三八号」は、新年の御挨拶ということで会員の皆様からそれぞれの想いを書いて戴きました。

(掲載 五十音順)

昨年諫早市の百歳以上の方は九十九人で男九人、女九十人だそうです。山の神の時代到来です。山の神の皆さん、大いに楽しんで下さい。

また今年天皇の代替わり、平成ともおさらば。そして歴史も役目を果たし、感慨深いものがあります。

最後に皆様にとりまして、良き新年でありますように！ (江口 淳二)

あけましておめでとうございます。平成最後の年となる今年のお正月、皆様におかれましては、いかが過ごされましたでしょうか。

さて、中国の旧正月を祝う行事「春節祭」を起源とする長崎の冬の風物詩「長崎ランタンフェスティバル」が、今年は二月五日から二月十九日まで新地中華街や湊公園を中心に開催されます。

新地中華街と湊公園に程近い旧長崎村十善寺郷にあった「唐人屋敷」内(現在は館内町)の土神堂前広場では、江戸時代、旧暦一月十五日(上元の日)には、唐人さんによる籠踊や唐人踊りが行われ、長崎奉行や諸役人達も招待されています。夜になると無数の燈籠に火が灯され、着飾った丸山遊女達も訪れて大いに賑わっていたそうです。

現在、「唐人屋敷」内の四つのお堂(福建会館・土神堂・天后堂・観音堂)には、期間中「ロウソク祈願」のため、赤いロウソク片手に観光客がお参りに来られます。四堂巡り：所要時間十五分、ロウソク四本・五百円)ご利益有りの四堂巡り祈願には、ぜひ皆様も一度お越し下さいませ。因みに四堂の一つ「観音堂」は、我が家の真下でございます。(大東 良平)

明けましておめでとうございます、また新しい一年が始まりました。君がため 春の野に出て若菜摘む

光孝天皇

わが衣手に 雪は降りつつ  
小学生の頃、我家のお正月は強引な母に強いられて加わる「百人一首」のかるた取りから始まりました。強い腕力、しかも手が早いし、下の句を覚えている姉に敵う筈のない私が、自分の目の前に並べる作戦で勝ち取った一枚がこの句でした。あれからほんの数十年…。意味の解る年齢も過ぎて、更に物忘れは特技となりましたが、今、昨日の事のように懐かしく思い出されます。

平成から新しい時代に向かう若者や子供たちが、日本文化の一つである「百人一首」や「かるた遊び」に、より身近で親しみ、そして楽しめるお正月であつたら大変嬉しく思います。(田川 康子)

おめでとうございます。

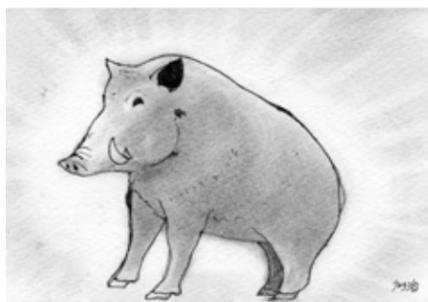
長崎をうたった唄は、たくさんあります。新しいものもあるのですが、明治・

新年おめでとうございます。

今日までお世話になった数々の思い出を感慨深く心に思い浮かべています。越中先生をはじめ、数多くの先生方のご指導やご教授、歴史散歩等々、貴重なものでした。郷土の歴史や文化を知り、益々郷土愛が昂まり、更に深く知ろうとする意欲も深まり、それが宝物となりました。今後も各々の恩恵を抛に活動を続けて参ります。

長崎人は古来より外国人との付き合いも古く、身構えることも少なく、フランクな性格と自負しています。明治生まれだった父も商売を通じてトミー・

グラバーさんと交際があったと時折話を聞いていました。時代の経過とともに、時勢も人間性も変化していきませんが、安寧を求める気持ちは今も同じではないでしょうか。皆様のご多幸をお祈り申し上げます。(内川 雅夫)



(イラスト：入内リョウ治 作)

新年おめでとうございます。

長崎の茂木が一五七一年イエズス会の領地となった八年間は、住民全てが切支丹でした。明治時代の布告により国教が神道となり、僧侶も全て諏訪の氏子となり廃仏毀釈の嵐が吹き荒れましたが、今は八百万の神様のもとで新年を迎えています。毎年、伊良林にある光源寺の除夜の鐘つきには四百人もの老若男女が集まり、鐘の余韻にひたり、次いで三社詣のお諏訪さん、お伊勢さん、松の森に出かけます。帰りは四百の石段があるザボン発祥の地・西山神社で元日桜を仰ぎ曙光を待ち、それから熱い心と冷えた身体でお待ち待つ「えんち」へ急いでとんぼ返りし、プチプチの数の子、鯨の小腸百尋、西山木場の唐人菜他十三種の具がある長崎雑煮を堪能し無病息災を祈ります。正月参りは他に、穴弘法、黒崎の教会、浦上教会、七面山、延命寺等と色々有難い名所がございます。(嬉野 純二)

新年あけましておめでとうございます。

今年には私にとつて九十二回目の正月です。定年の時は八十歳位まで生きれば…と思っていたのが九十二歳…。伊達政宗の詩に、「馬上少年過ぐ世平らかにして 白髪多し残軀天の赦す所 樂しまずして是を如何せん」と云うのがあります。残軀は大いに楽しみ、九十二歳と長生き出来たのは長崎歴史文化協会があったからこそと感謝しています。後は天の赦す所まで…。今年干支は「つちのとの亥」己亥です。猪は「山の神」の化身と云われており、

大正に作られて今も唄われているものに「ぶらぶら節」「浜節」などがあります。その他にも「春雨」「長崎小唄」「長崎甚句」などがあり、それらは今では料亭で芸子衆の踊りでしか出会う事が出来なくなりました。「傘を忘れた蜚の茶屋で」とか「彦山」に入る月を合図に思案橋」とか風情のある素敵な文句です。長崎には特殊な歴史があり、そこにあるドラマが詩になっています。是非知って頂きたいものがたくさんあります。

ここ長崎歴史文化協会では、多くの話を聞かせて頂きました。それは、私自身が歴史の中にいる事を感じさせられる時でもあり、たくさんの方達との出会いがありました。(津田 尚美)

新年あけましておめでとうございます。

私事ではありますが、日本ソムリエ協会のワインエキスパート認定試験に合格致しました。試験ではフランスをはじめ二十五ヶ国のワインの歴史、ブドウ品種、栽培地域等のほか、チーズ・料理・日本酒など多岐にわたる知見が求められ、筆記の一次試験とテイスティングの二次試験に合格し、認定証書とバッジを授かりました。

さて、日本の文献上ワインが登場するのは、室町時代後期の『後報興院記』で「珍陀」という酒を飲んだ」との記述です。ポルトガルのブドウ品種に「Tinta・Roriz (ティンタ・ロリス)」という品種があり、赤ワインを「Tinto(ティント)」と呼んでいます。ポルトガル人が長崎市中に散宿した事や、イエズス会の教会でワインが供されたことを考えれば、長崎人のDNAにはきっと赤ワインが記憶されているはず！そう考えると今宵も赤ワインと共に夜を過ごしたくなります。(松尾 憲和)

新年おめでとうございます。

私がお正月というとき必ず「暮れのお餅つき」を思い出します。私が育った町は以前、城山二丁目と言われていました。畑が宅地となり、今でいうニュータウン。若い夫婦が移り住み、新しい家がどんどん建つようになりました。みんな、手持ちのお金が少ない生活でしたが、お正月の神様を迎える為のお餅はガンバって搗いていました。当時は近所の空き地にムシロを敷いて臼を置き、賃働きの男の人が各家の餅を次々に搗きました。餅つきの日は朝から夕方まで大変な重労働で、奥さん達も白いカッポウ着で手伝います。子ども会の年中行事でもなく、イベントのお土産でもなく、神事として餅搗きをするのです。もちろん、大人の領分なので子ども達は見ているのがせいぜい。煙の向こうで、大きな掛け声で餅搗きをしている様子を思い出すと、あの頃の大人は「カッコ良かったな」としみじみ思います。(村本 京)

